

松木本興先生の教化と近代宗学

上 田 本 昌

まえがき

昭和四十四年十月廿四日、宗務院に於て、第二十二回日蓮宗教学研究発表大会が開かれ、特別発表として、「近代宗学の回顧と展望」という共通テーマで、物故された望月歆厚教授（三回忌）、松木本興教授（三回忌）、鈴木一成教授（七回忌）、執行海秀教授（一周忌）の四先生の回忌を偲んで、それぞれ学風と業績を発表したが、本稿はその折りの要旨である。

一、

身延山に於ける大学の前学頭として、永年尽力して来られた松木本興先生は、明治三十一年五月に、身延町の新宿で誕生され、望月日明上人の門下となり、祖山学院に学ばれた。

大正八年三月、祖山学院高等部本科を卒業するや、直に内地留学生として、東部天台宗大学（現在の大正大学）に学ばれ、天台学を専攻された。然し、先生は宗学者たらんとする希望の外に、若くから、布教師としての望みも、又大きいものがあつた。

即ち、学生時代の先生は胸部疾患にかかり、転地療養を要することとなった。その当時に於ては「不治の病」死病として恐れられた肺結核に胸をむしばまれつつも、「助からぬ生命ならば、思い切って布教に身を入れてみよう」と決心し、北海道へ渡って、勇猛獅子吼された。この死身弘法の結果、病魔とも打ち勝つことが出来、同時に布教師としての基礎が、着々固められて行ったことになる。

大正十二年三月、天台宗大学卒業と同時に母校たる祖山学院の助教授に就任され、二年後の大正十四年には教授に昇任されて、天台学を講じられるに至った。

先生は若い頃から学者として身を立てようと考えられたのではなく、むしろ立派な布教師として大いに活躍しようとして決意されたようである。然し、先生の目された布教師というのは、常に学問の裏付けを持った布教であり伝道であって、法華経と祖書をいつも「研鑽」しておられた。先生は特に宗学については、「研究」と云う言葉をさけられ、専ら「研鑽」の語を用いておられた。

布教研修所の所長をしておられた当時、先生は、研修生に対し、「凡そ僧侶たる者は、 \wedge 常説法教化 \vee の精神を忘れてはならない。」と述べられ、更に「教化とは、教化者が一方的に相手を説得感化させるといふのではなく、それを通して教化者自身、自他共に教化されて行くのである。」と述べられ、教化者としての基本的態度と学問の重要性を強調しておられた。

即ち先生は、教化者たらんと欲して、先ずそのためには、自身が学を修めなくてはならないことを痛感し、「教化者たる前に、謙虚な気持で学究の徒となる覚悟が必要である。」といっておられた。

従来、宗門の一つの傾向として、布教を志す者、学者を志す者、或いは修法を志す者、等とそれぞれ目標に向って分化され、現在それはますます細分化されて行くように見受けられる。然かも専門的な分野が深かまれば深かまる程他の分野との関連はうすれていくかの如くに見られる。例せば、布教者の分野では布教のためのテクニクは盛んに修習されているが、その裏付けとなる宗学に就いては、専ら宗学者にゆだねており、学問の分野にまで進んで立ち入ろうとしない。又一方、学者といわれる分野のグループに在っては、経典や祖書の研究に没頭し、布教の面までは手が届き兼ねるといふのがいつわらざる現状のようである。

先生がその出発に於て、中心の目標を教化者に置き、布教することに主眼を据えながらも、敢て学者としての道を歩まれたことは、そこに大きな意義を持つていたことになると思うのである。

布教師としての外部的な活動の一面と学者としての内部的な思索の一面、この両面を備えてこそ、眞の教化者としての姿が認められて来ることになるであらう。

かつて、学生を交えての研究会の終ったあとで、或る学生が「先生は布教師が本務なのですか、それとも学者が本業なのですか。」と云う質問をした事があった。この問には我々も興味を持っていたので、果して先生はどのような答え方をされるか、と期待していたところ、「僕は布教師でもなければ、又学者でもないよ。」と言下に云われたことを覚えてゐる。

先生の説明によると、出発はたしかに布教師にならうということであったが、立派な布教師たる為には、先ず修学

しなくてはならないと気付き、学問の道に入ったが、遂に学者にも布教師にもなれなかったというのである。これは勿論、先生の謙虚な気持から出た言葉であるが、然しその後につけ加えられた先生の言葉には、重要なものが含まれていたように思う。それはたしか「今の質問にもあるように、もともと布教師と学者とを区別して考える所に、既に根本的な問題があるのではないだろうか。学者は学者、布教師は布教師と、分業化されてしまったような考え方をするとしたら、それは最早や仏教でいう「教化者」としては、カタワ者でしかありえないのではないだろうか。」という意味の言葉であったように記憶している。

三、

先生はその生涯の経歴からみてもわかる如く、布教師としては、昭和三年身延山布教師に任命されてから以来、専任・常任布教師として、昭和二十二年には身延山執事布教部長になられ、布教審議会委員、布教研修所長、特派布教師等と宗門に於ける布教の第一線を歩み続けて来られており、又その反面、身延山に於ける大学の教授とし学頭として、更に身延山の教学部長とし、或いは宗門の教学審議会委員として、所謂、学者としての道も是れ又永年に亘って歩まれて来られている。

こうした先生の経歴をふりかえって見る時に、身延で生れ育った謂は「身延人」としての生涯の上に、布教と学問の両面を備えた「教化者」としての姿を窺うことが出来ると思うのである。

先生の説を要約してみると、宗学を志す者と、教化者との間には、ややもすると、分業化が目立ち、宗学を研究する者と、宗学によって教化をしようとする者との間に、へだたりが見受けられ、両者の間には次第に他との関連を意

識しようと思せず、遂いには全く独立した分野として考えてしまふ程にまでなつて來ているように思われる点が、少ない、と云うのである。

これは近代宗学の研究者が、宗学の「学」を、近代科学の「学」に近づけようと苦心し、一般科学と同一の線上に並べて、「宗学を科学化しよう」とした結果、宗学に於ける分野の細分化・専門化が見られるようになり、勢い宗学を研究することに終始しなくてはならない結果となりつつあるやに見受けられるのであつて、深く考えさせられる問題であると云えよう。

宗学の近代化に伴なう「科学化」の是非については一応さて置き、「常説法教化」を使命とする「本化門下」としての立場からすれば、こうした研究者と布教者との疎外感が、次第に大きなものとなつて行きつつある処に問題があると云わなくてはならないであらう。

即ち、布教の実践は布教師に、宗学の研究は宗学者に、そして宗門の政治は宗政家に、とそれぞれ一任してしまつて、大多数の僧職に在る者は、そうした所謂「専門家」のやり方を周回から見守っているか、もしくは全く無関心でいると云う傾向を示しているかに見られるのである。特に農山村に於ける寺院には、過疎による経済的余裕がみられないため、一層こうした傾向を示しつつあるようである。

先生はこうした専門家に依つて主たる動きを見せている近代の宗学と布教の傾向について、常に心を痛め、僧職にある者の総てが、常に「眞の教化者」となるよう念じておられた。所謂、先生の云う眞の教化者とは、「心を宗学において研鑽を深める一方、身は布教の場に処して鍊磨に勤める」と云うのであつて、宗門は一部少数の「専門家」によつて動かすのではなく、大多数の「教化者」によつて進展されるべきであると云うのである。

特に現代は大衆化の時代であり、情報化の時代である。一人でも多くの人々を対象として、宗門全体が教化活動に身を入れてこそ、護法活動も成果が期待できることであろう。つまり、上求菩提の宗学研究と、下化衆生の布教実践を兼ね備えることにより、始めて本化門下としての教化者の理想像が浮き彫りにされることになるのであって、

「一日学問により得た事柄は、たとえそれが一文一句たりとも、次の日には、それを未聞の人々に伝えて行くべきである。」

と云う先生の持論は、正しく此の間の事情を物語っているものと云うことが出来よう。

こうした先生の立場から、もう一度ふりかえって見ると、布教はもとより、宗学研究も法式儀礼も、更に宗門の政治をとることも、すべては、上求菩提・下化衆生を目的とした本化教化者としての働きとして表されて来るのでなくてはならないとするのである。

換言すれば、教化者としての「本務」を離れた宗学研究や法式儀礼、更に宗政等は、何らそこに日蓮門下としての特色を持ったものではないと云う説を持っておられたのである。

事実、先生はこうした自説を身を以て実践されておられ、灯火の元、修学考究された昨夜の宗学は、翌日の布教に於て直に活かされておられたのである。又時には布教のために、大学に於ける「天台学」や「法華経講義」の講座が時折り休講となったこともある程であり、先生の生涯から布教を切り離すことは不可能であった。

四、

特に戦後に於ける先生は、研究室にたて籠って、古文書を相手に、明け暮れペンを走らせると云う姿よりも、布教

のための法衣をまとい、東奔西走されている時の方が、多かつたように見受けられる。此のため多くの学者がその晩年に至って集大成する著述・論文の類は、あまり見られないが、ただ身延に於ける宗祖の動静を研鑽し、調査してまとめられた『身延のお祖師様』が遺されている。

これは所謂、教化者としての立場で著されたものであり、永年『みのぶ』教報誌に連載されたものであって、同じく先生の著された『日蓮聖人伝十講』の続編とも云うべきものである。此の「聖人伝十講」は、先生が若い頃から、「法話」や「お説教」等を通じて、折り有る度に、布教して来られた「聖人伝」を、晩年に至ってまとめられたものであり、第一講の「末法の要行」から始めて、大聖人出生当時の内外情勢、仏教界の状態、並に出家の動機等を述べられた第二講に続き、第三講は「研究時代」として、虚空藏祈願と八宗兼学を、それぞれ祖文引用に依って明らかにし、その次に「立教開宗」の第四講が続く。この開宗の講より、先生の特徴ある文体が展開して行くのであって、第五講の「鎌倉の伝道と第一回諫言」では、一つ一つ祖書に徴しながら事項の説明を続けられ、第六講以下では、四大法難をそれぞれ取り挙げて、第九講に及んでいる。その講の終りに「佐渡の信徒及び、第十講身延山の日蓮聖人は拙筆『身延のお祖師様』にゆづる。」と記るされている点からみて明らか如く、『身延のお祖師さま』は、此の「聖人伝十講」の中の、第十講に相当するものであることが知れる。

『身延のお祖師さま』は、先生が終戦後一時、大学を離れて、総本山の教学部長になられ、『みのぶ』教報の発行者となられた昭和二十二・三年頃から、その教報誌上に約十年間にわたり、連載されたものである。

先ず、△御入山の聖意▽から始めて、山の御撰定、身延山の環境、御在山中の年数、御草庵の人数、御在山中の御健康、と章を進め、△御述作及御講義▽に至る八章を以て、一応『身延のお祖師さま』（天の巻）とし、昭和二十四

年六月に、身延教報社から出版されている。身延山に於ける宗祖のご生活が、つぶさに描かれている点で特色がある。其の後も引続いて連載され、「地の巻」として出版されるはずであったが、遂に連載のままで、「地の巻」の刊行が見られていないのは、残念なことである。

身延人としての先生が『身延のお祖師さま』を執筆されるようになったのは、むしろ当然と云うことが出来るが、先生は宗祖の一代について、これを幼年期(貞応元年一、二二二)天福元年一、二二二)修養期(天福元年五月)建長五年四月)伝道期(立教開宗)御入滅)と三分し、更に此の中の伝道期について、特に序正流通の三時区分を与え、鎌倉期を序分、佐渡期を正宗分、身延期を流通分として、歴史的にこのように「区分することは自他共許の事である」とし、試みに昭定遺文一・二巻に収められた御遺文によると、序分(鎌倉)九一通、正宗分(佐渡)五二通(計一四三通(八〇八P)あるのに対し、流通分(身延)は二九一通(一、一二五P)に及んでいることを明かし、その上、「これは私見であるが」とことわって、宗学上から本化上行としての宗祖が、釈尊の本弟子として、末法に法華経弘通を使命とせられた点を考え、次のような区分が試みられている。

即ち、過去遠々劫以来現在の修養期迄を序分とし、立教開宗より佐渡期の終り迄を正宗分とし、「此の正宗中に留難に遭はるる度に開顕し給へる別頭の大法を結束して、末法に流布せしむべく、其の中心拠点としての根本道場を奠定せられたのが、総流通分たる身延期として拝する事は出来ないだろうか。」と述べ、宗祖一代に於ける身延期を総流通分として、特に重視し、且つ、身延期の御遺文が、鎌倉・佐渡の兩期に比して、前述の如く二倍以上に及ぶことを指摘し、注目すべきこととしていのである。

此の点については、『棲神』第三十六号(祖山学院五十周年記念号・昭和三十七年刊)の巻頭論文の中で、日蓮聖人

御婦倉より身延御入山までの研鑽を發表しているが、宗祖の「身延に於ける御指示は、法華経の生活化にあられた」とし、御遺文中にも「生活と宗教」の面に関する部類が多いことなどを挙げ、身延期に於ける宗祖の立場を、さまざまな角度から眺めつつ、その重要性を明らかにしている。

五、

こうした観点から、先生は常に『身延のお祖師さま』を、この上なく尊崇され、又末法に於ける法華経行者の活きた見本として、尊重されて来られたものと思える。即ち、宗祖が「法華経の實踐」に力を注ぎ、更にそれを生活化しようとした如く、門下の我々は又宗祖の通りに、法華経の生活化を図らなくてはならないと考えられておられたようである。

先生は『棲神』第十五号（昭和四年十二月）の中で、「経典を信仰的に尊奉するにせよ、科学的に其の教理を批判し、歴史的に成立年代を探究するにせよ、是等が既に我等の聖典であり、修証の羅針である事に異論はあるまい。」と述べられ、更に「従って是を客観的に物語を讀むが如き態度に見終らんか、古聖の所謂、△終日他の宝を教へて、自に於て半銭の分無き▽に終るであろう。」と経典を取り扱う上で、最も注意すべき点を掲げ、ともすると、学問研究のためのみに終始してしまつて、肝心な信行・修証から遊離してしまふ恐れのある研究態度に、厳しい警告を与えている。

「仏教徒の使命は、経典を自己に反省し、時代に生かす事である。換言せば総ての経典の文字の中に、自己の血を通す事が我らの態度でなくてはならない。」と述べて、現代に生きる教化者としての在り方を明らかにしている。特

にこの中で「経典の中に自己の血を通す」と云う言葉は、先生の教化者として、又学者としての生涯を一貫していた最も大事なことがらのように思える。

「われもいたし人をも教化候へ」と云う祖文に照して見た時、此の先生の言葉は、現代に生きる教化者にとって、真に味うべきものと云えよう。

松木先生の教化者としての一端を窺うと同時に、近代宗学の一傾向にまで及んだ次第である。